

投稿論文

韓国人日本語学習者のコミュニケーションに おける問題処理方略

李 賢 珍*

Strategy of Problem-Management
by Korean Japanese-Language Learners

Hyunjin LEE

本稿ではコミュニケーション方略を「第二言語学習者が目標言語の規則を十分に習得していないにもかかわらず発話しようとする状況で、コミュニケーション上の問題を処理し、コミュニケーションを円滑にするために用いる手段」と定義し、韓国人日本語学習者と日本語の母語話者の接触場面で用いられるコミュニケーション方略を記述的に把握した。まず、コミュニケーション方略という用語を再検討した上で、コミュニケーション上の問題を克服することに役立つ「問題処理方略」を取り上げた。次に、韓国人学習者の問題処理方略を分析した結果、11項目に分類でき、それらの形態と機能との関係を明らかにすることができた。さらに、①漢語の発音を何回か繰り返し、相手に正しいかどうか確認を求める韓国語の日本語化方略 ②漢字を書いて、意図した概念を伝える方略 ③日韓関係による話題回避の方略など、様々な韓国人学習者の問題処理方略の実態が明らかになった。

1. 問題の所在と本研究の目的

本稿の目的は、韓国人日本語学習者におけるコミュニケーション方略 (communication strategies) 使用の実態を明らかにし、日本語の会話教育に示唆を与えることである。

韓国の高等学校における日本語科の教育は、日本との積極的な交流に向けて「日本語によるコミュニケーション能力」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育てることを目標としている¹⁾。すなわち、コミュニケーション活動を通じて、言語能力 (語彙知識・文法知識) だけではなく、コミュニケー

*筑波大学大学院博士後期課程

ションの場や状況に応じて適切に言語を使用する能力（言語運用能力）を育成することを教育目標としている。コミュニケーション能力や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度は、実際に言語能力を駆使しながらコミュニケーションを行うことによって養われると考えられる。しかし、日本語科の授業で学習者にコミュニケーションの積極的な参加を促すだけでは、学習者は言語能力が限られているために、いかにしたらいいか戸惑ったり、コミュニケーションに問題が生じることに對して不安を覚えたりすることが多い。したがって、コミュニケーション方略を指導していくことが重要になってくる。

「第二言語で、限られた能力しか持たない学習者が意味を伝えるために取り入れる手段」を近年の第二言語教育研究では「コミュニケーション方略」と称し、重要な研究対象として位置づけてきた。実際にコミュニケーション方略を使い、限られた言語能力を補うことは、学習者がコミュニケーションを維持・進行させることに役立ち、言語運用能力の育成に繋がると考えられる。以上から本稿では韓国における日本語教育の状況を踏まえ、コミュニケーション方略に注目する。

コミュニケーション方略の研究は、第二言語学習者のコミュニケーションの問題を解決し、コミュニケーション能力を高めることを目的として数多くの実証的研究が行われてきた（Tarone 1977, Færch & Kasper 1983, Yule & Tarone 1997, Dornyei 1995）^②。そして、日本語学習者のコミュニケーション方略についても、その成果が発表されている（尾崎 1981・1993, 椿 2002）^③。しかし、日本語教育におけるコミュニケーション方略研究のほとんどは、すべての日本語学習者を同一視して行われてきた。日本語学習者が日本語の母語話者とコミュニケーションを行う際には、学習者の言語体系である中間言語が用いられる。中間言語は、言語転移という母語からの影響を受けながらも次第に目標言語に近づいていく過渡的で可変的な自然言語である。したがって、中間言語でのコミュニケーションには、学習者の母語および社会・文化的な背景が反映されると考えられる。日本語と韓国語は文の構造が酷似している。また、同じ漢字文化圏に属しており、多くの漢語がほとんど同じ意味と用法で使われている^④。したがって、韓国人日本語学習者の場合、学習者の母語（韓国語）に基づいたコミュニケーション方略の使用が現れると考えられる。

しかし、接触場面における韓国人日本語学習者のコミュニケーション方略についてその実態は、まだ明らかにされていない状態である。本稿は韓国人学習者の

会話教育にコミュニケーション方略を取り入れるための視点を得ることを目的としている。そのためには、まず韓国人学習者が日本語の母語話者とのコミュニケーションにおいて、どのようなコミュニケーション方略を用いているかを調べるのが、第一に行われるべき基礎調査である。

そこで、本稿では韓国人日本語学習者におけるコミュニケーション方略の実態を、日本人とのインタビューのデータに基づいて分析する。

2. コミュニケーション方略

方略 (strategies) という用語は、言語使用や言語学習に関する一般用語として使用されることもあれば、コミュニケーション方略や言語学習方略などのように専門用語として使用されることもある。これが用語をめぐる混乱の原因にもなっている。その結果、日本語教育におけるコミュニケーション方略という用語は、明確な定義づけという点で研究者間の一致をみないまま今日に至っている。また、方略的能力 (strategic competence) とコミュニケーション方略の関係についても曖昧にしたまま研究が進められている。そこで、まず、コミュニケーション能力 (communicative competence) という観点からコミュニケーション方略の概念を定義し、コミュニケーション方略に対する筆者の立場を明らかにしたい。

2-1. コミュニケーション能力と方略的能力とコミュニケーション方略との関係

Canale & Swain (1980)⁶⁾は、コミュニケーション能力を教育的側面から考察し、理論的枠組みとして文法的能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力という四つの構成要素を提示した。そこでコミュニケーション方略の概念を取り入れた「方略的能力 (strategic competence)」をコミュニケーション能力の必須要素の一つとして位置づけたのである。彼らは、方略的能力を「運用の変異や不十分な能力のために起こるコミュニケーションの崩壊 (breakdown) を補うために要求される言語的、非言語的コミュニケーション方略」と定義し、方略的能力 (=コミュニケーション方略) を第二言語学習の目標概念として捉えた。

しかし、Canale (1983)⁶⁾では「方略的能力」の定義が次のように変更されている。

- (a)不十分な能力、あるいは言語行為の限界のために生じたコミュニケーションの行き詰まりを補うための、および(b)発話の修辭的効果を高めるための、言語的および非言語的な方略の習熟度

Canale は、コミュニケーション方略を習得することが方略的能力に繋がると述べ、Canale & Swain (1980) における方略的能力=コミュニケーション方略という捉え方を変更した。さらに、コミュニケーション方略が(a)コミュニケーション上の問題を解決する手段だけではなく、(b)コミュニケーション効果を高める目的でも使われるとし、方略的能力の概念を拡大した。

さらに、Bachman (1990)⁹⁾は Canale らのコミュニケーション能力を受け継ぎ、方略的能力がコミュニケーション上果たすメカニズムに関する詳細なモデルを提示した。Bachman の言う方略的能力とは、「文脈化 (contextualized) された伝達的な言語使用状況において、言語能力(文法的能力, 社会言語学的能力, 談話能力)を駆使するのに必要な能力」である。すなわち、方略的能力はコミュニケーション全体に必要な各種の能力と有機的に連動しているものと見たのである。

以上から、本稿では「方略的能力」をコミュニケーション能力の他の要素である文法的能力, 社会言語学的能力, 談話能力の駆使に必要な運用能力であるとする。そして、「コミュニケーション方略」を第二言語学習者がコミュニケーションを行う際に産出した「方略的能力」の具体的な言語の姿 (product) であると考え

2-2. コミュニケーション方略の分析枠組み

本稿ではコミュニケーション方略を以下のように定義する。

第二言語学習者が目標言語の規則を十分に習得していないにもかかわらず発話しようとする状況において、コミュニケーション上の問題を処理し、コミュニケーションを円滑にするために用いる手段

そして、Canale (1983), 尾崎 (1981, 1993) におけるコミュニケーション方略の概念を取り入れ¹⁰⁾、コミュニケーション方略は二つに分ける。一つは「問題処理方略」で、コミュニケーション上の問題を処理する方略である。もう一つは、「円滑化方略」で、コミュニケーション上の問題は現われていないところで、コミュニケーションをより効果的に行うために用いる手段であり、会話を維持し、進展させるといふ働きをする方略である。本稿では「問題処理方略」に焦点を当てて、分析を行うことにする。

ネウストプニー (1981)¹¹⁾によると、第二言語学習者は、コミュニケーション能力が限られているので、不完全にしかコミュニケーションできないし、自分の能力の限界についてはっきりとした意識を持っている。これらの意識によって第二

言語学習者は、実際コミュニケーション上の問題が生じない場合にも、問題が起こるといふ予測から、問題を防ぐためにあるコミュニケーション方略を使用すると考えられる。そこで、本稿では問題処理方略を「問題防止方略」（問題を予測し、問題が起こることを防ぐための方略）と「問題解決方略」（実際に問題が現れた場合、その問題を解決する方略）の二つに分け、考察を行う。その際、問題解決方略の場合は、コミュニケーション上の問題が生じた場面だけを分析の対象とする。

また、本稿では他人との関係認識に焦点を当てた Tarone (1977) の分類を援用し、相互作用におけるコミュニケーション方略に注目する。Færch & Kasper (1983) は、コミュニケーション方略を「第二言語の表現上の問題を個人が解決するもの」とし、その使用を認知処理的に説明している。しかし、実際のコミュニケーションは複数の人間の協同作業であり、話者同士が協力してコミュニケーションを管理していかなければならない。したがって、第二言語学習者が目標言語の母語話者とコミュニケーションを行うとき、相手である母語話者の役割は、学習者のコミュニケーション方略使用に強く影響すると考えられる。Tarone は相互作用におけるコミュニケーション方略として「援助の要求 (appeal for assistance)」を提示しているが、その詳細はあまり言及されていない。そこで、本稿ではコミュニケーション方略を「単独方略」（問題処理方略を使用するに当たって自分自身の努力だけで問題を処理しようとする方略）と「協力方略」（相手との相互作用によって問題処理を試みる方略）に分けて考察を行う。さらに、「協力方略」の下位分類を試みる。

3. 調査方法

本調査では探索的調査、質的調査の手法を軸に、二つのデータ収集法で集められたデータを総合的に分析した。調査の具体的な内容は次の通りである。

3-1. リサーチクエスチョン

本調査の分析と考察は、以下のリサーチクエスチョンを柱に行った。

- (1) 韓国人日本語学習者はどのように問題処理方略を使用しているか。
- (2) 韓国人日本語学習者が用いる問題処理方略の中で母語の影響とされる特徴は見られるか。

3-2. 被験者

被験者は筑波大学の留学生センターにて日本語の授業を受けている韓国人日本語学習者9人(A, B, C, D, E, F, G, H, I)である。本調査では韓国人学習者における多様な問題処理方略の特徴を見出すため、日本人との接触場面の多い中・上級学習者を対象に調査を行った。データ収集期間は2002年8月～10月, 2004年3月～4月である。

3-3. データ収集方法

○インタビュー

データの収集方法としては、ACTFL(全米外国語教師協議会)のOPI(Oral Proficiency Interview)の形式を用いた⁽⁴⁾。まず、①導入部では簡単な挨拶や短い自己紹介をしてもらい、②一文で答えられるような質問をし、③徐々に具体的な事柄について話させ、学習者の言語的挫折を引き出そうとした。インタビューは、被験者たちと面識のない日本人(NS)に依頼し、一人ずつ約20分間のインタビューを行った。

OPIの手法を利用した理由は、以下の二点である。

- (1) OPIでは上級学習者にも必ず言語的挫折が現われ、学習者の多様な問題処理方略が見られるため、問題処理方略研究に適するデータが得られる。
- (2) OPIは会話の形式で行われるため、実際のコミュニケーションに近いデータが得られる。

○事後面談(follow-up interview)

インタビューを録音・文字化し、その資料をもとに一週間以内に、会話のプロセスを内省報告させ、被験者が用いた問題処理方略を見出す方法をとった。実際の手順は、①研究の目的を説明する ②学習者の問題処理方略だと思われる部分について質問をし、問題処理方略と判断された場合、そのプロセスを明らかにす

表1. 被験者のプロフィール

| 被験者(性別) | A(男) | B(男) | C(女) | D(女) | E(男) | F(女) | G(女) | H(男) | I(男) |
|--------------------|------|-----------|-----------|------|------|-----------|-----------|------|------|
| 日本語学習歴 | 1年 | 1年 2ヶ月 | 3年 | 2年 | 3年 | 2年 5ヶ月 | 3年 | 10年 | 10年 |
| 日本滞在歴 | 6ヶ月 | 10ヶ月 | 1年 2ヶ月 | 11ヶ月 | 6ヶ月 | 1年 5ヶ月 | 1年 6ヶ月 | 11ヶ月 | 8ヶ月 |
| レベル ⁽⁵⁾ | 4 | 4 | 5 | 5 | 6 | 6 | 7 | 7 | 7 |

る、という手順である。事後面談は学習者が自由に自分の考えを語れるように韓国語で行った。

以上のインタビュー（OPI，事後面談）をデジタル・レコーダーとビデオカメラで記録・文字化し、分析のデータとした。

4. 調査結果および考察

4-1. 調査結果

データを分析した結果、韓国人日本語学習者における問題処理方略は次のように分類された。

表2. 韓国人日本語学習者における問題処理方略の分類⁽¹²⁾

| | | | |
|-------------|-----------|------------------|-----------|
| I. 問題防止方略* | 単独方略* | 1. 回避 | ①話題回避 |
| | | | ②ことば回避 |
| | 協力方略* | 2. 確認要求* | |
| II. 問題解決方略* | 単独方略* | 3. 言い換え（類似語，上位語） | |
| | | 4. 遠まわし表現 | ①説明 |
| | | | ②例示 |
| | | 5. コード切り替え | |
| | | 6. 韓国語の日本語化* | |
| | | 7. 借用 | |
| | | 8. 外国語の日本語化* | |
| | | 9. 繰り返し* | |
| | 10. 身振り言語 | | |
| | | 協力方略* | 11. 援助の要求 |
| | | | ②説明要求* |
| | | | ③聞き出し* |

以下では、上記の分類に基づいて韓国人日本語学習者における問題処理方略のデータを報告する。

I. 問題防止方略

1. 回避（表2のI-1-①）

わからない語彙や問題を起こす恐れのある話題を意図的に避けること。

(事例1) <NSの日韓関係の展望に関する質問に対し>

(NSは native speaker 日本人母語話者, 以下同様)

E: 私の自分で考えなんだから、言いにくいんですけど。(NS: ええ, そうか) 私が日本語で、この、誤ることがあるから、この、私の韓国語で話したら日本語で話したら、私が悪いこととか、この、いいこととか、この、混じって話すのは難しいですから、…そんなことが説明することが難しい、難しいし、私も、説明したくないです、この問題に関しては。私が説明すること、曖昧なことだから。ごめんなさい。
《回避》

EはNSに「自分の日本語力が不足していて、これからの日韓関係を語るのには難しく、誤解される可能性がある」と言いながら、話題を回避した。それから、回避に対する謝罪を言っている。しかし、事後面談でのEの説明によると、自分は強い反日感情を持っているし、よってこれからの日韓関係がよくなっていくことを望まないが、初対面の日本人に対しそれを話したくなかったそうである。すなわち、これは今までのコミュニケーション方略研究で捉えられたような言語知識の不足による回避ではなく、心理的要因、社会文化的要因(韓国と日本の独特な歴史関係)からの回避である。

2. 確認要求(表2のI-2)

自分の話したことばや内容を相手が理解したかどうかを確認すること。問題が起こる恐れがあると考えた時点で、語や文の切れ目で上昇イントネーションを使い、相手に正しいかどうか、意味が通じたかどうかを確認する。

(事例2)

(↑は上昇イントネーション, 以下同様)

D: 私が韓国にいた時も、元々サウナ↑(NS: ええ)元々サウナ好きだったんですよ。でも、温泉は、あまり韓国は、私有名なところはあまり行ったことがありません。

事後面談におけるDの説明によると、Dは「サウナ」という語彙が日本にも使われているかどうか確信がなかったので、NSを見ながら上昇イントネーションを使い、正しいかどうか、確認を求めたそうである。それに対し、NSは「ええ」と理解したという合図を送り、Dは最初に言おうとしたサウナが好きという話を続けることができた。確認要求は、日本語学習者が問題を起こす恐れがあると考えたとき、そのことばを相手に確認要求し、問題を防ぐ方略である。

II. 問題解決方略

3. 言い換え(表2のII-3)

知らないことばを同義語や類似の語彙で代用すること。

(事例3)

B : 今は研究生のシンブンですよね。(波線は学習者の誤用, 以下同様)

NS : え? 研究員の何ですか?

B : シンブン。シンブン↑資格↑《言い換え》

Bは韓国語における漢語の漢字音をそのまま使うという誤りを犯し(身分を「신분(シンブン)」と発音), NSはその意味を理解することができなかったの
で、そのままでは話を進めることができないというコミュニケーション上の問題
が生じた。そこで、Bはまず「資格」という類似の語彙で言い換え、問題解決を
図っている。

4. 遠回し表現(表2のII-4-①)

知らないことばを冗漫な説明や例示によって言い換えること。

(事例4)

H : 氷点っていう小説を読んだんですけど

NS : 焦点ですか?

H : いいえ、水が凍る点という《遠まわし表現 - 説明》

NS : ああ、氷点、はいはい。

Hは高校時代に読んだ「氷点」という小説について話そうとしたが、NSが
「焦点」と聞き間違ったのでその話を続けることができなかった。そこで、Hは
「氷点」を「水が凍る点」と説明することでその問題を解決している。言い換えと
遠まわし表現は、学習者の持っている日本語の知識を最大限に利用する方略であ
る。また、本調査の分析結果、問題解決の確率も高かったことから、日本語学
習及びコミュニケーションに役立つ方略であると考えられる。

5. コード切り替え(表2のII-5)

知らないことばを韓国語そのまま代用すること。

(事例5)

F : 大きい人形を、あのう韓国語で가마(カマ)っていう《コード切り替え》、それ
に乗せて

NS : 大きい人形があつてそれを?

F : 가마に乗せる。

NS : え?

Fは「輿」という単語を知らなかったため、韓国語の「가마(カマ)」をその

まま使用して話を続けようとした。しかし、NSは韓国語である「가마」の意味がわからないので、Fの話を理解することができなかった。結局、「コード切り替え」方略によって問題を解決されず、さらなるコミュニケーション上の問題が生じたのである。この事例のように、単独で使用されたコード切り替えの多くは問題の根本的な解決には至らなかった。日本語教育では、コード切り替えよりは言い換えや遠まわし表現など日本語の知識を用いた方略を使用するように指導する必要がある。

6. 韓国語の日本語化 (表2のII-6)

韓国語における漢語の知識を問題解決に利用すること。

(事例6)

A : あ、楽しい小説ですけど、(NS : おお) このシュジン、シュジンゴン、シュジン
コン↑《韓国語の日本語化》

NS : 主人公？

A : あ、主人公。(NS : うん) 主人公の雰囲気(NS : うん) ちょっと…

Aは、「主人公」ということばを伝えるために韓国語における漢語の知識を利用した。Aは韓国語音から「主人公」の日本語音を推測し類似の音を繰り返している。それに対し、NSは「主人公(シュジンコウ)?」と正しい日本語音を提示し、以上のやりとりによってAは自分の日本語知識の不足による問題を解決している。事后面談の結果から、多くの韓国人学習者が日本語の漢語と韓国語の漢語の発音が類似していることを察知しており、その音韻情報を問題処理方略として用いていることがわかった。この方略は同じ漢字文化圏で多くの漢語の発音が類似している、韓国人日本語学習者独特の方略であると考えられる。

(事例7)

D : マスタコースとは少し違います。私たちはがくぎ【学位】の目的じゃなくて、ただ一年間…

NS : はい? 何の目的で

D : がくぎ【学位】《繰り返し》(NS : はい?) あう、(紙に漢字で「学位」と書く)《韓国語の日本語化》

NS : ああ、学位ですね。(D : はいはい) 学位をとることが目的ではない… (省略)

この例で、Dは「学位」の発音を間違えたので、NSはDの話が理解できず、そのことば(がくぎ)の意味を聞いている。Dは相手の聞き間違いだと判断し、繰り返し方略で問題を解決しようとしたが、問題解決には至らなかった。そこで、

Dは「がくぎ」という発音が正確でないことに気づき、机に指で「学位」と漢字で書いて相手にその意味を伝えて問題を解決した。この方略は韓国語の漢語の知識を利用した方略であり、書き言葉による問題処理方略であるという点で注目すべきである。

7. 借用 (表2のII-7)

目標言語である日本語以外の外国語をそのまま使用すること。

(事例8)

F : 中等学校のかがく【科学】ですから、(NS:うん?) かがく《繰り返し》, うーん, かがいには四つの分野があって、これをどう総合的に教えるかについて勉強しています。

NS:うーん。かがく, かがくってどう書くんですか?

F :うーん。かがく, 英語で science です。《借用》

NS:あ、なるほど。科学ですね。

この例で、Fの「科学(かがく)」という発音はNSに「かがく」と聞こえたので、Fはそのまま話を続けることができないという問題に直面している。Fは相手の聞き間違いだと判断し、繰り返し方略で問題を解決しようとしたが、問題解決には至らなかった。そこで、英語の science をそのまま使用して問題を解決している。しかし、借用方略は相手のNSが借用することばを知らない場合、さらなるコミュニケーション上の問題が生じる恐れがある。

8. 外国語の日本語化 (表2のII-8)

目標言語である日本語以外の外国語を日本語の発音を真似て使用すること。

(事例9)

C : 体操中でもモダンダンスみたいなこととスタップ, ステップ, 英語でステップ という

NS:ああ、ステップですね。

C :はい、その基本的なステップを後バレーボールとバスケットボール…

事后面談によると、Cは step ということばが日本語では分からなかったので、英語で代用して話を続けようとしたという。しかし、英語をそのまま使用するより、日本語はすべて母音で終わると知識を利用し、[step] の発音を「sutepu」に替えて用いたのである。この「外国語の日本語化」も借用と同様に、相手が日本語化される外国語そのものを知らない場合は問題解決にはならない恐れがある。

9. 繰り返し (表2のII-9)

コミュニケーション上の問題が生じたが、自分のせいではなく相手の聞き間違いだと思ったときにことばを繰り返すこと。

(事例10)

C : 日本の方がもっといい方法だと思いますよ。

NS : にはんほう?

C : いい方法。《繰り返し》

Cは韓国と日本における剣道の違いについて話している。Cは自分の話した「いい方法」ということばをNSが聞き間違えたと判断したので、そのことばをもう一度繰り返すことで問題を解決している。繰り返しは接触場面だけではなく、母語場面でもよく使用される方略である。この方略は、母語の習得過程で身につく方略であると考えられるし、特定の言語知識を利用することでもないで、日本語教育の場面で特に指導する必要はないと考えられる。

10. 身振り言語 (表2のII-10)

ジェスチャーのようなノンバーバルな方法で意図する概念を伝える

(事例11)

B : あのう、霞ヶ浦の上にもなんか、なんていうんですか、光がハンサ、ハンサ (身振り言語; 大きくV字を書く振りをしながら反射を表現) 《韓国語の日本語化&身振り言語》されて (NS : うん) みえたり、ま、あそこでも結構楽しかったです。

Bは「反射」の概念をNSに伝えようとしたが、その正確なことばがわからず、韓国語の漢語の知識を利用して反射を推理した(韓国語の日本語化)。しかし、その発音には自信なかったので、身振り言語を使用して問題解決を図ったという。このように身振り言語は単独よりは、他の方略と一緒に使用される傾向があった。

11. 援助の要求 (表2のII-11)

相手にコミュニケーション上の問題を知らせて助けを求めること。相手との相互作用によって問題解決を試みる方略であり、以下の三つが考えられる。

- ①反復要求; 相手が言ったことがよく聞き取れなくてもう一度言ってほしいという要求を出すこと。(表2のII-11-①)
- ②説明要求; 相手が言ったことが聞き取れても、ことばの意味や話し手の発話の意図がわからない場合に説明を要求すること。(表2のII-11-②)

③聞き出し；類似な音や意味で聞き手に助けを求めることで意図した概念を聞き出すこと。(表2のⅡ-11-③)

(事例12)

NS：何してます、毎日？

A：え？《援助の要求-①反復要求》

NS：毎日何してました？

A：このごろ試験がたくさん…(省略)

AはNSが言ったことがよく聞き取れなかったので、「え？」ということによって、もう一度言ってほしいという要求を出している。それに対し、NSは前の話を繰り返し、Aの要求に答えている。Aの「反復要求」→NSの「反復」という過程により、問題が解決された。

(事例13)

NS：Dさん、えーと、じゃ、自己紹介を、お願いします。

D：自己紹介…ですか？ ウォ、…具体的に何を話したらいいかちょっとわからないけど。

《援助の要求-②説明要求》

DはNSが要求した自己紹介の具体的な内容がわからなかったので、答えることができないというコミュニケーション上の問題が生じた。Aはその問題を解決するために、NSに説明を要求し、NSの説明によって、コミュニケーションを再開することになる。

(事例14)

I：トリビアとか(NS：はい、トリビア)クイズ番組(NS：クイズ?)クイズ↑
キズ↑(NS：ああ、子供の番組?)いえいえ、キッズじゃなくて、問題を出して答える番組を何って言うんですか?《援助の要求-③聞き出し》

NS：ああ、クイズ番組？

I：はい、クイズ番組とか…(省略)

Iは韓国語の外来語の発音の影響で、クイズ(quiz)をクイズと発音し、相手のNSにその意味が伝わらないという問題を起こした。そこで、Iは類似な音を繰り返し、さらにはクイズ番組について説明しながら、それが日本語で何であるかをNSに聞いている。それに対し、NSは「クイズ番組」と的確なことを与え、以上のやりとり(聞き出し→答え)によってIは自分の誤りによるコミュニケーション上の問題を解決した。聞き出しは自分の努力だけではなく、相手との

相互作用で問題を解決しようとする点で、言い換え方略とは区別される。

4-2. 考察—韓国人日本語学習者における問題処理方略

韓国人日本語学習者9人における問題処理方略の調査結果の全体を表3に示す。

本調査の被験者（A～I）の問題処理方略について、次の4点を指摘することができよう。

- (1)被験者は、問題処理方略の指導を受けたことがないにも関わらず、多様な問題処理方略の型を使用しながら、コミュニケーションを行っていることが観察された。ただし、被験者の問題処理方略の使用実態（主に使用する方略の種類）には違いがある。
- (2)被験者全員に使用された問題処理方略は「確認要求」であり、9人の韓国人日本語学習者は自分の不足している言語能力がコミュニケーション上の問題につながらないように、前もって防ごうとする傾向が見られる（事例2）。
- (3)問題処理方略は、複数で使われる場合がある。例えば、「借用」や「言い換え」を使用し、問題解決を試みたがうまくいかなかった場合、「遠回し表現」を使用する場合などである。
- (4)問題処理方略は、ただ単に学習者の言語能力の不足を補う理由からだけではなく、話者の社会的要因や心理的要因による問題に対処するためにも使用されている（事例1）。

表3. 問題処理方略別使用頻度

| 被験者 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | 合計 |
|-------------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|--------|
| 1. 回避 | 1/17 | 0/13 | 0/13 | 1/14 | 3/15 | 0/7 | 0/6 | 1/7 | 0/8 | 6/100 |
| 2. 確認要求 | 2/17 | 2/13 | 4/13 | 6/14 | 2/15 | 2/7 | 3/6 | 3/7 | 4/8 | 28/100 |
| 3. 言い換え | 1/17 | 1/13 | 0/13 | 0/14 | 1/15 | 0/7 | 0/6 | 0/7 | 1/8 | 4/100 |
| 4. 遠まわし表現 | 1/17 | 2/13 | 5/13 | 2/14 | 3/15 | 2/7 | 1/6 | 1/7 | 0/8 | 17/100 |
| 5. コード切り替え | 0/17 | 3/13 | 0/13 | 0/14 | 0/15 | 1/7 | 0/6 | 0/7 | 2/8 | 6/100 |
| 6. 韓国語の日本語化 | 3/17 | 4/13 | 1/13 | 0/14 | 1/15 | 0/7 | 0/6 | 0/7 | 0/8 | 9/100 |
| 7. 借用 | 0/17 | 0/13 | 0/13 | 1/14 | 1/15 | 1/7 | 0/6 | 0/7 | 0/8 | 3/100 |
| 8. 外国語の日本語化 | 0/17 | 0/13 | 1/13 | 3/14 | 0/15 | 0/7 | 1/6 | 0/7 | 0/8 | 5/100 |
| 9. 繰り返し | 3/17 | 0/13 | 2/13 | 1/14 | 3/15 | 0/7 | 1/6 | 1/7 | 0/8 | 11/100 |
| 10. 身振り言語 | 0/17 | 1/13 | 0/13 | 0/14 | 0/15 | 1/7 | 0/6 | 0/7 | 0/8 | 2/100 |
| 11. 援助の要求 | 6/17 | 0/13 | 0/13 | 0/14 | 1/15 | 0/7 | 0/6 | 1/7 | 1/8 | 9/100 |

※（該当問題処理方略の使用数/使用した問題処理方略の総数）

以上、実態調査のデータに基づいて韓国人日本語学習者における問題処理方略を分析してきたが、上記の問題処理方略は、韓国人日本語学習者特有の文脈においてはどのような特徴をもって具現化するのであろうか。そこで、以下では今回の調査データの範囲で明らかになった韓国人日本語学習者の特徴的な問題処理方略の使用実態について考察を加えることにする。本調査で観察された韓国人日本語学習者の問題処理方略の特徴は次の3点である。

- (1)韓国語の日本語化方略（事例6）
- (2)漢字を書き、意図した概念を伝える方略（事例7）
- (3)日韓関係による話題回避の方略（事例1）

韓国は日本と同じく漢字文化圏に属しており、多くの漢字がほとんど同じ意味と用法で使われているという特徴がある。また、漢語の音読の場合、類似の読み方が多数存在する。そのため、従来、韓国人日本語学習者の誤用分析では、韓国語の干渉による漢語の誤りが指摘されてきた（許 1991, 趙 1993）⁽³⁾。しかし、本調査ではその特徴（同じ漢字文化圏）が、問題処理方略の一つ（漢語の発音を繰り返しながら相手に確認を求めることによって正しい発音を見出す）として現れた（事例6）。韓国人学習者は日本語の漢語と韓国語の漢語の発音が類似していることを察知しており、その音韻情報を問題処理方略として用いたのである。さらに注目すべきは、漢字を書き、意図した概念を伝えるという書き言葉による問題処理方略が見られたということである（事例7）。すなわち、学習者の母語能力（韓国語における漢語の知識）が目標言語（日本語）におけるコミュニケーション能力の一部としても使用されていることがわかる。韓国人日本語学習者に、韓国語と日本語における「漢語の共有」に気づかせることは学習の効率化にも結びつくと考えられる。

一方、今までの日本語教育で取り上げられることがなかった相手の気持ちに配慮して使われる回避方略（反日感情について話すことを避ける）が見られたのは注目すべきである。これは言語知識の不足による回避ではなく、心理的要因、社会文化的要因に対処する方略である。韓国人の日本語学習には「反日感情」という学習効果に影響を及ぼし得る要素がある。それが本調査では、韓国人日本語学習者と日本語母語話者との相互作用におけるコミュニケーション上の問題として現れたのである。韓国における日本語教育が日本との積極的な交流を目指すのであれば、言語能力の教育だけではなく、日本に対する客観的な理解と正しい日本

観を持たせる態度教育にも力を注ぐ必要があると考えられる。

5. 結語

5-1. 問題処理方略指導の必要性

以上、韓国人日本語学習者が日本人との相互作用において用いる問題処理方略の実態について分析を行った。その結果、11項目に分類でき、それらの形態と機能との関係を明らかにすることができた。さらに、①韓国語の漢語知識を利用する「韓国語の日本語化」方略 ②漢字を書いて、意図した概念を伝える方略 ③日韓関係による話題回避の方略など、様々な韓国人学習者の問題処理方略の実態も明らかになった。

実態調査の分析結果から、韓国人日本語学習者はコミュニケーション方略の教育を受けなくても、一定の問題処理方略を使用することによって不足している言語能力を補っていたといえる。Bialystok (1990)⁽⁴⁾は第一言語コミュニケーション方略と第二言語コミュニケーション方略は共通の認知メカニズムを有していると主張し、「学習者に教えるべきものは、コミュニケーション方略ではなく言語である」と述べている。つまり、コミュニケーション方略は第一言語習得過程においてすでに習得されており、第二言語教育に取り入れる必要はないということである。しかし、Bialystokが教育の必要性を否定したのは、コミュニケーション方略を第二言語学習者の産物としてではなく、コミュニケーション方略を産み出すまでの認知処理過程として見なしたからである。

本稿では、コミュニケーション方略を「第二言語学習者がコミュニケーションを行う際に現れる、『方略的能力』の具体的な言語の姿」として見なし、実態調査を行った。その結果、各学習者における問題処理方略の使用には多様な傾向が見られた。「言い換え」や「遠回し表現」など自分の限られた日本語の知識を最大限に利用しながらコミュニケーションを行う学習者もいれば、主に回避方略を用いる消極的な学習者もいた。また、「コードの切り替え」や「韓国語の日本語化」など学習者が第一言語（韓国語）では使用しない方略も多々見られた。第一言語におけるコミュニケーション方略と第二言語におけるそれとは、用いる言語の形態も違えば、使用する状況も違う。したがって、言い換えのようなコミュニケーション方略は普遍的であり、第一言語話者同士のコミュニケーションに使用されるとしても、そのような方略を第二言語ではどんな場合に、どのように使うかを学

習者に指導する必要がある。つまり、コミュニケーション方略の認知処理過程でなく、コミュニケーション方略を効果的に使用する方法を教えることである。さらに、何らかの理由からコミュニケーション上の問題が生じた場合、学習者は自分の能力の範囲内で問題処理方略を使用するように奨励されるべきであり、それらを使用する機会を与えることに教育的な意義があると考えられる。例えば、学習者に問題状況を与え、沈黙のままではいるよりは問題処理方略を使用してコミュニケーションを維持するように指導すべきである。そうすることによって、学習者はコミュニケーションで生じる様々な問題を回避せず、コミュニケーション方略を意識的に使う心得が持てるだろう。また、自分の能力の範囲内でコミュニケーション方略を用いながらコミュニケーション上の問題を克服し、コミュニケーションを成立させ維持することは、言語を駆使する能力である方略的能力の育成に繋がると考えられる。

5-2. 今後の課題

今後の課題は以下の2点である。

(1) 学習者の母語による問題処理方略使用の実態を明らかにする。

本研究では、韓国人日本語学習者の問題処理方略使用の実態を明らかにするために、韓国人日本語学習者9人を対象に調査を行った。しかし、韓国人学習者9人の事例だけでは量的・質的に不十分である。他の母語（例えば、英語や中国語など）の学習者と比較分析することで、韓国人学習者の問題処理方略はより明らかになると考えられる。

(2) 学習レベルによる問題処理方略使用の実態を明らかにする。

本研究では、韓国人学習者における多様な問題処理方略を見出すため、日本人との接触場面の多い、中・上級学習者を対象に調査を行った。しかし、学習レベルの違いは使用する方略に影響を与えると考えられる。問題処理方略研究の目的が日本語の会話教育に示唆を与えることであれば、学習レベルによる問題処理使用の違いも検討する必要がある。さらに、望ましい問題処理方略の指導を実現するためには、どの問題処理方略が日本語学習及び日本語でのコミュニケーションに有効であるかについて詳細な調査研究が必要である。

註

(1) 李賢珍 (2003) 「第二言語習得過程におけるコミュニケーション方略—韓国人日本語学

- 習者の会話教育におけるコミュニケーション方略の導入の意義』『人文科教育研究』30号, 人文科教育学会, p. 82
- (2) Tarone, E. (1977) Conscious communication strategies in interlanguage: A progress report. In H. Brown, C. Yorio, and R. Crymes (eds.), *On TESOL 77. Teaching and learning English as a second language*. Washington, D. C.: TESOL, pp. 194-203
- Færch, C., and Kasper, G. (1983) Plans and Strategies in Foreign Language Communication. In C. Færch and G. Kasper (eds.), *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman, pp. 20-60.
- Dornyei, Z. (1995) On the Teachability of Communication Strategies. *TESOL Quarterly*, 29 (1): pp. 55-85
- Yule, G., and Tarone, E. (1997) Investigating Communication Strategies in L2 Reference: Pros and Cons. In G. Kasper and E. Kellerman (eds.) *Communication Strategies: Psycholinguistic and Sociolinguistic Perspectives*. Longman, pp. 17-30
- (3) 尾崎明人 (1981) 「上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45号, 日本語教育学会, pp. 41-52
- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー——『聞き返し』の発話交換をめぐって——」『日本語教育』81号, pp. 19-30
- 椿由紀子 (2002) 「電話会話における『聞き返し』の回避方略」『平成14年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 日本語教育学会, pp. 113-118
- (4) 許卿姫 (1991) 「韓国話話者の日本語」『日本語学』5-10, 明治書院, p. 94
- (5) Canale, M., and Swain, M. (1980) Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics*, 1 (1): pp. 1-47
- (6) Canale, M. (1983) From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy. J. C. Richards and R. W. Schmidt, (eds.) *Language and Communication*. Longman: pp. 2-27
- (7) Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Consideration in Language Testing*. Oxford University Press
- (8) 尾崎 (1993) は「訂正ストラテジー」と「円滑化のストラテジー」をあわせたものがコミュニケーション・ストラテジー (本稿におけるコミュニケーション方略) であると考えた。
- (9) J. V. ネウストプニー (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45号, 日本語教育学会, pp. 30-40
- (10) 留学生センターにおける授業のレベルは1~7までであり, 1が初級, 7が上級である。
- (11) OPI とは, 「外国語学習者の会話のタスク達成能力を, 一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテスト」である (牧野成一 2001)。
- 牧野成一 (2001) 『ACTFL — OPI 入門』アルク, p. 9
- (12) 「問題処理方略」の下位分類は, Tarone (1977) を参考にし, 本調査の分析結果を

基に筆者が再構築したものである。*印は李が新たに提案した分類である。

Tarone (1977) のコミュニケーション方略の分類

1. 回避； a. 話題回避 b. メッセージ放棄
 2. 言い換え； a. 類似 b. 新造語 c. 遠回し
 3. 意識的な転移； a. 直訳 b. 言語切り替え
 4. 援助の要請
 5. 身振り言語
- (13) 趙南星 (1993) 「韓国人日本語学習者による漢字書きの誤りの分析と評価」『日本語教育』80号, 日本語教育学会, pp. 28-48
- (14) Bialystok, E (1990) *Communication Strategies: A Psychological Analysis of Second-language Use*. Oxford University Press